

子供服のデザインと色彩 (第1報)

——嗜好色の実態調査——

後藤喜恵・原田妙子

Children's Clothing : Designs and Colors [I] Research into those Colors Actually Preferred

Y. GOTÔ and T. HARADA

目 的

幼児期は運動能力、体重、身長等身体成長期にあると共に、知的、情緒的、社会的等人間形成の面においても発達は著しい時期である。したがって、この時期の衣服は、活動的にも、審美的にも、心身両面の成長に調和のとれた快適な衣服であることが望ましい。

近年子供服ばかりでなく、全ての衣服が豊富に出回り多様化している。しかし、子供を取り巻く衣服事情は外観の美、季節感に重点が置かれ、心身の発達に適応し、日常生活を通してのしつけの出来る機能的な衣服が少ないように思われる。

そこでこれらを考慮し、子供の成長、環境や心理を把握し、子供に適合する最も子供らしい衣服をデザインするために、構成面・色彩面および素材面からも研究することを目的とした。

今回は、衣服を与える最も身近な母親の意識が重要な役割を果すものと考え、心理的影響の大きい色彩について、子供と母親の両者における嗜好色を主に調査した。

方 法

1. 幼稚園児による色彩嗜好調査

1) 調査方法

3歳児から5歳児を対象に、服装色としての嗜好を調査するために、幼児人体模型女児・男児(身長50cm)を押絵風パネルに製作した。これに服装模型を15色のフェルトで製作し、人体模型にマジック・テープで止め着せられるよう工夫し、調査に用いた。また、服装模型と同色のシーチング(木綿100%、平織)でスモックを製作した。

服装模型では、15色の中から好きな色彩を2～3枚選び、人体模型に付けさせた。次に、嫌いな色彩についても同様に行ない、可能な限り、好き嫌いの理由を聞いた。スモックについては、嗜好色3枚を選択し、着用させた。

2) 調査時期

夏期：昭和59年7月・9月、冬期：昭和59年11月・12月

3) 調査場所および調査人数

名古屋文化幼稚園：夏期68名・冬期43名、名古屋女子大学付属幼稚園：夏期94名・冬期78名

2. アンケート調査

名古屋女子大学附属幼稚園児全員の父母 350 名を対象に、子供服に関する実態調査をアンケートで行なった。回収率は 94.6%であった。

1) 調査対象

区分	月 齢	女兒	男児	合計
年少	～ 4 歳 6 ヶ月	44	32	76
年中	4 歳 7 ヶ月～ 5 歳 6 ヶ月	48	72	120
年長	5 歳 7 ヶ月～	70	65	135
合計		162	169	331

2) 記入者年齢

性別 単位 母親年齢	女 児		男 児		合 計	
	人	%	人	%	人	%
～30歳	27	16.7	34	20.1	61	18.4
31歳～35歳	98	60.5	93	55.0	191	57.7
36歳～40歳	30	18.5	37	21.9	67	20.3
41歳～	4	2.5	3	1.8	7	2.1
不 明	3	1.8	2	1.2	5	1.5
合 計	162	100.0	169	100.0	331	100.0

3) 家族構成・父母の職業

園児の兄弟人数は 2 人兄弟が最も多く、女兒は 68.5%，男児は 65.7%，次いで 3 人兄弟である。家族人数は 4 人が最も多く、女兒は 54.9%，男児 52.1%，次いで 5 人家族であった。

父母の職業をみると、父は会社員が最も多く 64.7%，次いで自営業 13.6%である。母の就業率は 12.4%と比較的低く、そのうち自営業が 41.5%を占めていた。

3. 調査に用いたカラー・チャート

1) アンケートの色彩に関する項目には、日本色彩研究所配色体系 P・C・C・S から 7 トーンと Neutral 5 段階の計 89 色を 1 cm 角に切り白紙台紙に 0.5 cm 間隔に貼布して用いた。以下、表 1 に示したようにトーン記号および色相記号を用いる。

2) 幼稚園児の色彩調査には、カラー・チャートのうち、p 8, p 18, p 24, lt 24, v 2, v 6, v 8, v 10, v 12, v 18, dp 8, dk 2, dk 18, mGy, W の 15 色を用いた。

表 1 P.C.C.S. カラー・チャート記号

トーン名	トーン記号	色 相 記 号											
pale	p	2R	4rO	6yO	8Y	10YG	12G	14BG	16gB	18B	20V	22P	24RP
light	lt	あ	あ	き	き	き	み	あ	み	あ	あ	む	あ
vivid	v	か	か	み	み	み	ど	お	ど	お	お	ら	か
deep	dp		み	の	の	の	り	み	み	み	む	さ	み
dark	dk		の	だ	だ	だ	り	の	の	の	ら	さ	の
light grayish	ltg		だ	い	い			あ			さ		さ
dull	d		い					お			さ		さ
Neutral	Ne	White(W)			light Gray (ltGy)		medium Gray (mGy)		dark Gray (dkGy)		Black(Bk)		

結果および考察

1. 子供服の実態

1) 子供服の入手方法

幼児が現在着用している服装の入手方法を、既製品、手作り服、お下がり服、もらい物の項目について記入してもらった結果である。

女・男児別、母親の年齢別に図1に示した。母親の年齢41才以上は少数のため省いた。既製品の購入率は、女兒では77~82%、男児では86~94%と母親の年齢に関係なく高率を示した。次いでお下がり服の利用が多く、母親の年齢別にみると、女・男児共に母親の年齢が高くなるにつれ、割合は高くなり女兒に一層顕著である。お下がり服を利用している者のうち、兄弟のある者は女兒が49.4%で、このうち姉からのお下がり服は57.7%、従姉妹38.0%である。男児は44.4%で、そのうち兄からのお下がり服は51.7%、従兄弟31.2%であった。このように兄弟や知人のお下がり服を再利用しているのは、汚れやいたみ、形くずれするより幼児の成長が早く、着用不可能となり、他にゆずる事が出来る物が多いものと思われる。これらは服種や着用回数によっても異なるが、1人当りの所持数も多く、また企業では既製品の縫製、材質等も研究され、品質向上がみられることからこのような結果が現れているものと思われる。

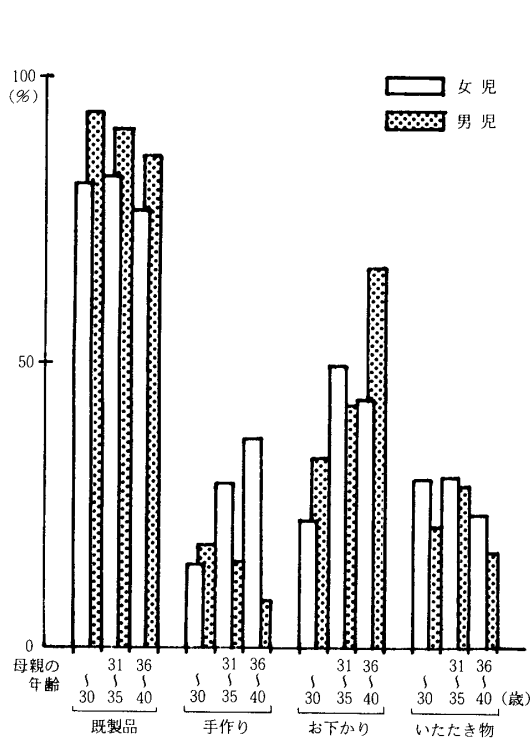


図1 入手方法

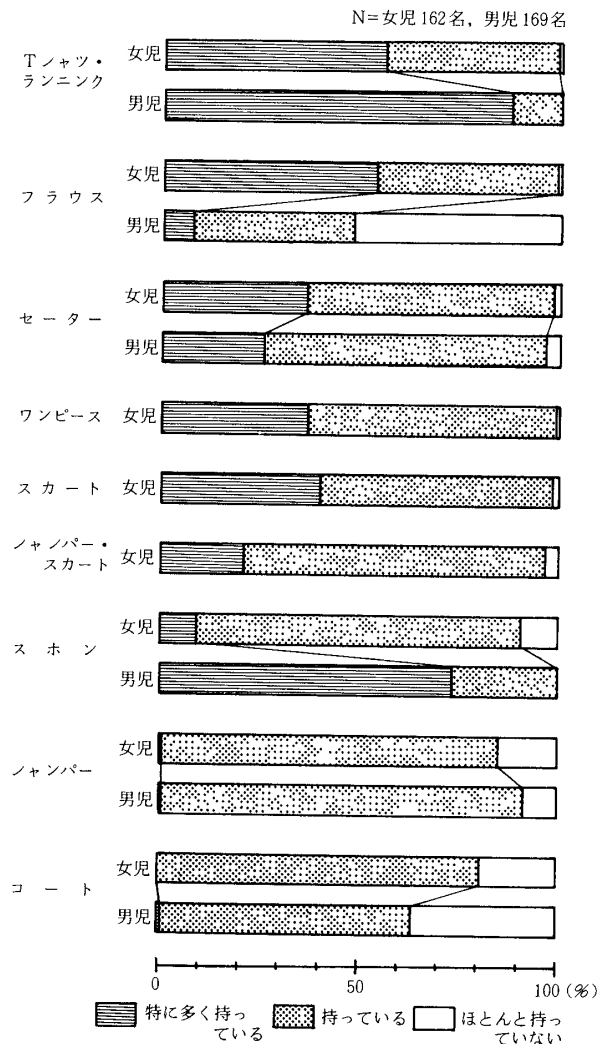


図2 服種別所持状況

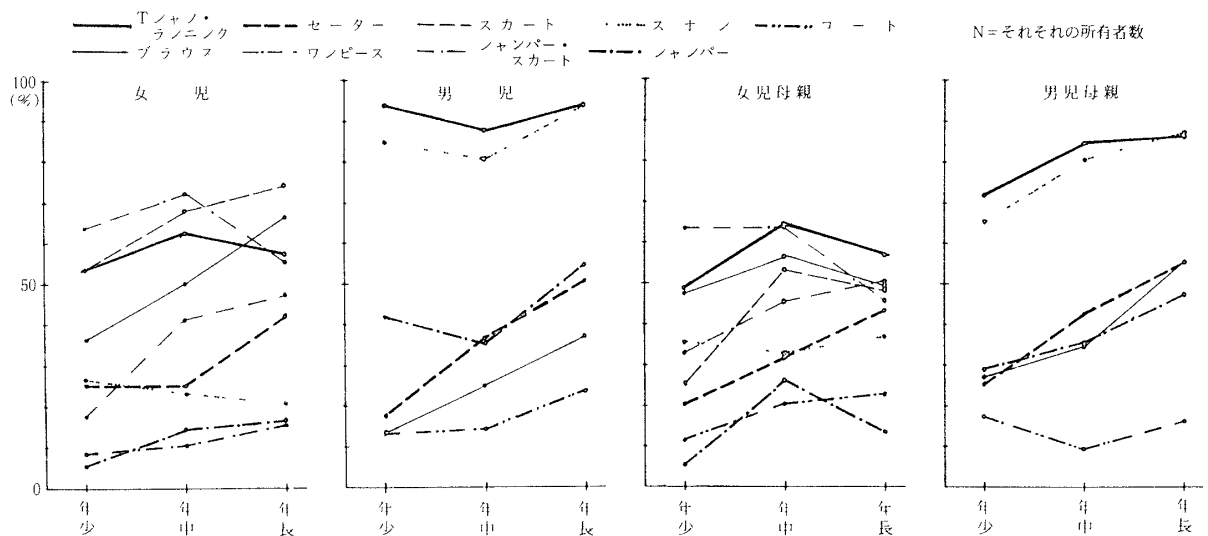


図3 好みの服種

母親や祖母らによる手作り服は少数であるが、
 女兒服の手作りやや多く、男女差がみられる。
 これらの大半は母親の手作りであるが、30歳までの
 14.8%は祖母の手作りである。女兒服は可愛ら
 しく製作意欲が増すという母親の意識も強く、ま
 た服種や材質によっては、わずかな端布で簡単に
 製作出来る事などが考えられる。

2) 服種別所持状況と好みの服種

所持している服種の割合を図2に、その服種に
 おける幼児と母親の好みの傾向を図3に示した。
 女兒はTシャツ・ランニング、ブラウス、ワンピ
 ース、スカート、ジャンパー・スカート等日常の遊
 び着に適した服種を97%以上所持している。特に
 多く持っているものの値は、Tシャツ・ランニ
 グ54.9%、ブラウス53.7%と半数を越えている。
 (図2)母・子共に好み率の高いのはワンピース
 であるが、年長になるとやや減少している。ワンピ
 ースが年少に好まれる理由として、比較的装飾が多
 く可愛い、幼児体型には着心地よく着くずれも少ない、母親にとっては着脱させやすい等
 が挙げられている。ブラウス、スカート、ジャンパー・スカート等組み合わせ着用するもの
 が、年長になるほど好まれている。母親の好みは年少のスカートに低率を示し、スカートより
 運動しやすく、保温効果も高い機能的なズボンの好みが高回り、母・子の違いを示した。(図3)
 男児は、女兒に比べ服種も少なく、上衣はTシャツ・ランニング、下衣はズボンが日常着のほ
 とんどを占めている。好みも母・子共に同傾向である。防寒用としては、女・男児の母・子共
 に、コートより機能的でラフな感覚のジャンパーの所持率、好み共に高くなっている。(図3)

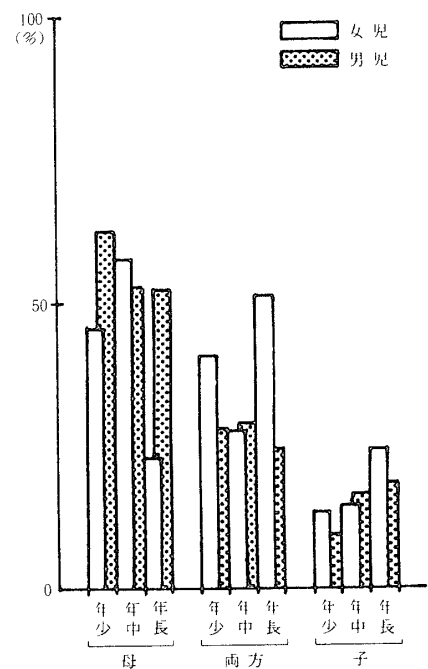


図4 日常着の選択者

これらの服種について、日常着用する服装は誰が選ぶかを図4に示した。
 母親が選ぶと答えた者が他の項目より高率を示し、男児は年少、年中、年長のいずれもが50%

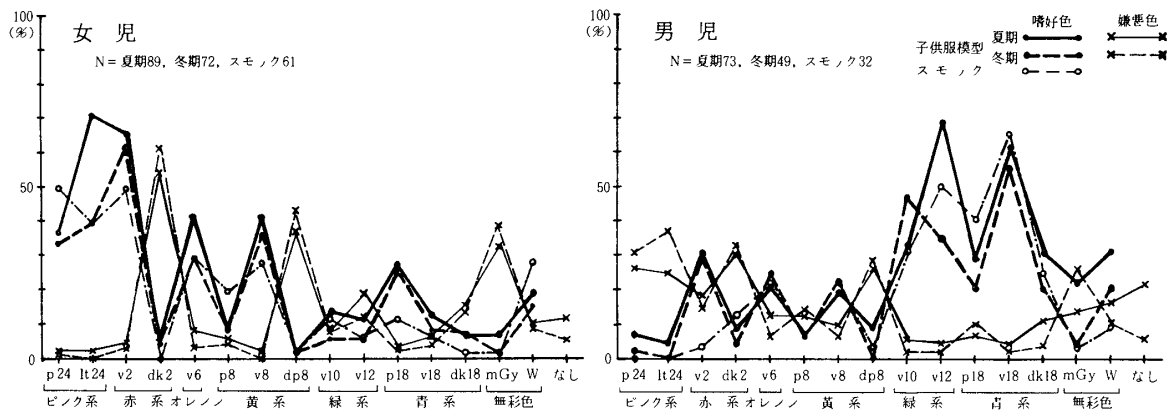


図5 子供服模型・スモックの嗜好・嫌悪色

を越えている。年長の女兒は、他に比べ低率を示している。逆に幼児自身が選択しているのは、どの年代も男児より女兒の方が高率を示し、年齢が高くなるにつれてその値が高率を示した。このように、幼児のころからすでに男児より女兒の方が、服装に対する興味・関心が芽生えるものとする。これらお下がり服の利用や手作り服、日常着の選択等衣生活を通して、子供のしつけ、母・子・友人らの身体的、愛情的な相互のふれあいを促進するさまざまな要因になると考える。

2. 嗜好色

1) 子供服模型およびスモックの嗜好・嫌悪色

服装色としての嗜好を夏期と冬期の2回に服装模型を用いて調査すると共に、実物スモックについても調査検討した。

図5に示したように、女兒についてみると、夏・冬期の嗜好色では、1t24が夏70.8%、v2の夏65.2%、冬61.1%と最も高い値を示した。次いでv6、v8の嗜好が高く、いずれもv、ltの暖色である。冬の嗜好色は、lt24が39.7%、v2が61.1%を示し、冬期には淡いピンクより赤の嗜好が高く、ここにやや季節感がうかがわれる。嫌悪色はdk2が夏53.9%、冬61.1%と高く、次いでdp8、mGyである。

スモックの嗜好色についても、v2、lt24、p24と赤・ピンク系に集中し、次いでWが出現した。Wはブラウス感覚として模型とはやや異なった傾向である。x²検定の結果、夏・冬期の嗜好色、嫌悪色、スモックの嗜好色のいずれも危険率1%で有意差が認められた。

男児の嗜好色は、夏ではv12が68.5%で最も高く、次いでv18が61.6%を示し、青・緑に高率を示した。冬の嗜好色は、v18が55.1%、v10が46.9%となり、冬には黄緑の嗜好が高く、夏・冬期の違いがやや感じられる。

スモックについては、v18が65.6%で服装模型同様高い嗜好を示し、次いでv12、p18である。これら男児の嗜好色は中性・寒色系に集中し、ここに男女の性差がはっきり現れている。嫌悪色は、lt24が36.7%で最も高く、次いでdk2、dp8でこれは女兒と同様である。しかし、女兒に比べ嫌悪色の値は低くバラツキが多かった。男児についてのx²検定の結果も、夏・冬期の嗜好色、嫌悪色およびスモックの嗜好色のいずれも危険率1%で有意差が認められた。

嗜好色、嫌悪色の理由として、それぞれに赤・ピンク系は「女の子の色」青・緑系は「男の子の色」という意見が多く、既成概念が相互に大きく働いている。その他テレビ番組の主人公のトレード・カラーや好きな花・くだもの色等を嗜好色として挙げている。嫌悪色としては、女・男児共通にdk8、dk2の濁色を挙げ、「汚い色」としてみている。また、嫌いな動物(ね

ずみ等), 食物(ピーマン, にんじん等)の色を嫌いとしている。男児に比べ, 女児はこれらの意見を積極的に話し, 色に対するイメージが豊富であると考えられる。

2) アンケート調査による幼児と母親の嗜好色
一般的な嗜好色として, カラー・サンプルの中から母親には3色以内を選んでもらった。子供の好みの色彩については, 日常生活, 遊び, 絵画等でよく用いる色彩を, 母親の側から観察して選んでもらったものである。平均嗜好色数は女児5色, 男児4.3色である。

①嗜好色のトーンおよび Neutral の傾向

カラー・サンプル 89 色を 7 トーンと Ne にまとめ, 被調査者である女児, 男児, 女児母親, 男児母親の各層に層別して, 好みの違い, 特色を見いだすため検討を行なった。

図 6 に示すように, 各層共に v の嗜好率が最も高く, 特に幼児において顕著である。次いで女児の lt が高率であり, 各層共にこの 2 トーンが全体平均を大きく上回っている。女児母親, 男児母親はこの他に Ne が平均をやや越えている。嗜好率の最も低いのは ltg で, 次いで d, dk である。こ

のように各層一様に嗜好が高いのが純色のさえた明るいトーンに集中し, 灰味のトーン, 濁った暗いトーンは非常に嗜好率が低くなっている。これら嗜好率の差の χ^2 検定結果は, 各層共に危険率 1% でトーン・Ne による差が認められた。各層の嗜好順位は, 幼児では 1 位が v, 2 位が lt と男女同順位を示し, 3 位は女児 p, 男児 Ne である。下位についても d, ltg と同順位であり, 3 位から 6 位までは入れ替わりが多少みられる。同様に母親についてみると, 両者に 1 位が v で, 2 位・3 位は lt・Ne の入れ替わりはあるが, 大差はないと予測される。これらの順位相関を表 2 に示したが, 各層全ての順位間に正の相関があり, 上位, 下位はほぼ同傾向である。そこでこれらの要因効果を分散分析でみると(表 3), 女・男児間, 女児母親・男児母親間

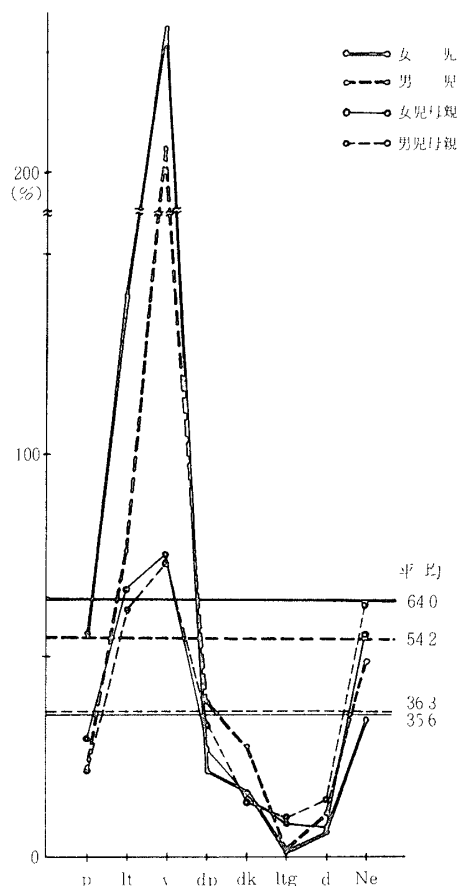


図 6 トーンおよび無彩色の嗜好率

表 2 嗜好色の順位相関(トーン・無彩色)

女 児				
男 児	0.837*			
女児母親	0.952**	—		
男児母親	—	0.905**	0.881**	
	女 児	男 児	女児母親	男児母親

* P<0.05 ** P<0.01

表 3 嗜好色の分散分析 (トーン・無彩色)

要 因	Fe
女 児 ・ 男 児 ト ー ン ・ Ne	0.91 25.80**
女児母親・男児母親 ト ー ン ・ Ne	0.11 78.31**
女 児 ・ 女 児 母 親 ト ー ン ・ Ne	1.72 3.03
男 児 ・ 男 児 母 親 ト ー ン ・ Ne	1.13 3.40

** P<0.01

には有意差なし，トーン・Ne 要因には 1%の有意差が認められた。女兒・女兒母親間，男児・男児母親間のいずれにも，被調査者間およびトーン・Ne の要因には有意差が認められなかった。以上のことから，幼児についてはトーン・Ne の嗜好の選択範囲がv, lt に集中し，さえた明るい美しい色彩を好むことが把握出来た。母親については，有意差は認められなかったが，値には近似の数値が算出され，さえた明るいトーンの好みは，他のトーンに比べ嗜好率がやや高いといえる。

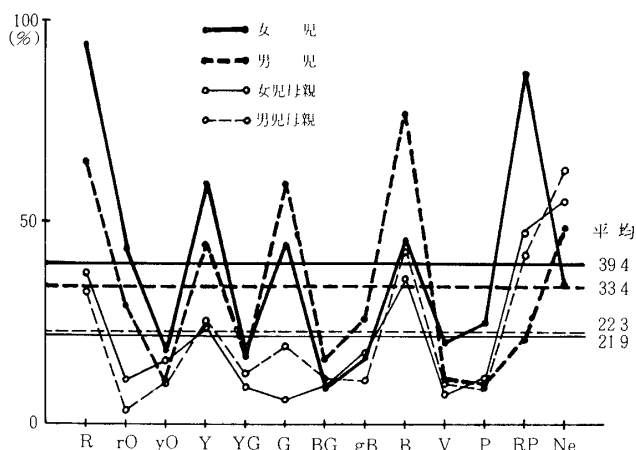


図7 色相および無彩色の嗜好率

②嗜好色の色相傾向

各色相およびNeの平均値を図7に示した。幼児，母親の各層共に嗜好率が高いのは，R, Y, B, RPの4色相とNeである。その他女兒にrO, Gが，男児にGが加わり，Neは女兒のみ平均値に達していない。このように母親に比較し幼児は，色相・Neにおいて嗜好範囲が広がっている。x²検定の結果は，各相共に危険率1%で色相・Neに有意差が認められた。上位を占める色相順位は，女兒ではR, RP, Y, 男児ではB, R, Gとなり，Rは女・男児共に嗜好率が高いが，その他の色相には性別による嗜好差が現れている。女兒母親はNe, RP, R, Bの順で，男児母親はNe, B, RP, Rの順となり，4位までの順位は両者前後するが色相の違いはみられない。5位以下は各層それぞれに嗜好色順位に一致がみられなかった。トーンの嗜好率と比較すると，各層共に色相の嗜好率は片寄りが少なく分散されている。

次に順位相関を表4に示したが，女・男児間，女兒母親・男児母親間には危険率5%で相関が認められ，女兒・女兒母親間には認められなかった。トーン・Neの全てに高い相関が認められたのに対して，色相・Neにはあまり強く働いていない。次に分散分析で要因効果をみた結果を表5に示した。幼児の被調査者間および色相・Neの要因に有意差が認められなかったが，母親には色相・Ne要因に危険率5%で有意差が認められた。女兒・女兒母親間には被調査者間，色相・Neの要因にそれぞれ危険率1%，5%で有意差が認められた。また，男児・男児母親間には色相・Neの要因に危険率5%で有意差が認められた。以上の結果から，幼児は性別による差がみられた。母親はNeのうちWの嗜好率が高く，幼児にはみられない傾向である。現在，衣

表4 嗜好色の順位相関(色相・無彩色)

女 児				
男 児	0.629*			
女兒母親	0.484	—		
男児母親	—	0.684	0.665*	
	女 児	男 児	女兒母親	男児母親

* p < 0.05

表5 嗜好色の分散分析(色相・無彩色)

要 因	Fe
女 児 ・ 男 児 色 相 ・ Ne	0.79 3.38
女兒母親・男児母親 色 相 ・ Ne	0.01 5.59**
女 児 ・ 女兒母親 色 相 ・ Ne	15.15** 6.20*
男 児 ・ 男児母親 色 相 ・ Ne	5.55 4.93*

* P < 0.05, ** P < 0.01

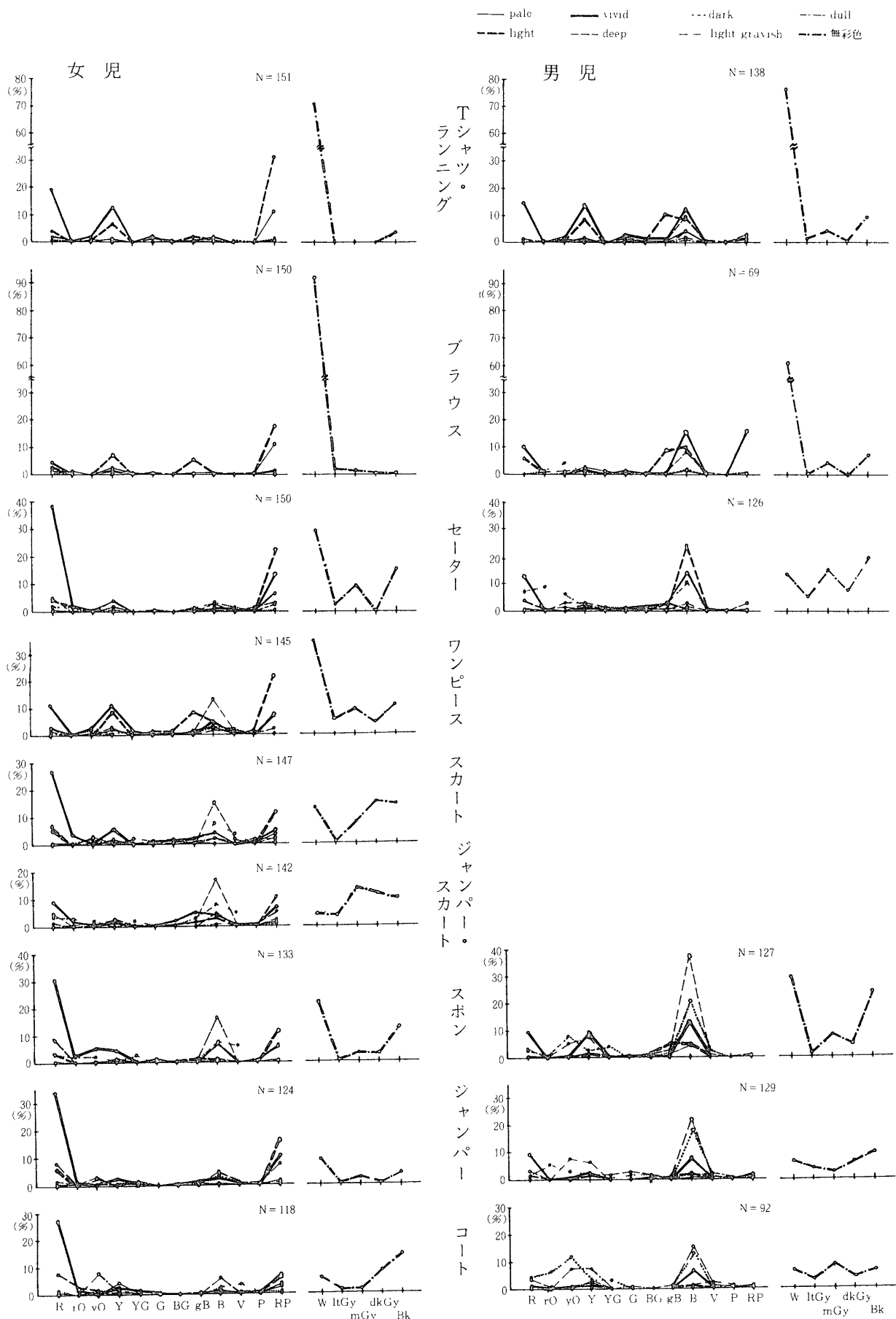


図8 所持服の色彩

表6 所持服適合度の検定
(トーン・無彩色)

	女兒 x_0^2	男児 x_0^2
p	32.41**	11.90*
lt	51.24**	43.17**
v	49.43**	35.55**
dp	60.25**	22.47**
dk	61.57**	36.55**
ltg	15.51*	6.99
d	19.73*	4.49
Ne	85.64**	55.86**
Tシャツ・ランニング	242.06**	242.03**
ブラウス	396.58**	166.02**
セーター	165.79**	122.99**
ワンピース	132.81**	—
スカート	95.14**	—
ジャンパー・スカート	66.87**	—
ズボン	128.21**	125.34**
ジャンパー	115.18**	60.56**
コート	74.71**	86.14**

* P < 0.05, ** P < 0.01

表7 所持服適合度の検定
(色相・無彩色)

	女兒 x_0^2	男児 x_0^2
R	53.84**	6.71
rO	6.18	13.22*
yO	17.81*	14.68*
Y	27.42**	6.82
YG	10.88	4.99
G	6.23	8.93
BG	16.45*	6.12
gB	20.92**	16.25**
B	90.20**	22.13**
V	13.12	1.17
P	3.84	5.65
RP	23.78**	37.72**
Ne	85.64**	55.86**
Tシャツ・ランニング	442.31**	482.93**
ブラウス	705.82**	328.89**
セーター	379.85**	266.83**
ワンピース	255.23**	—
スカート	215.38**	—
ジャンパー・スカート	166.30**	—
ズボン	216.73**	460.39**
ジャンパー	255.39**	216.82**
コート	178.10**	153.55**

* P < 0.05, ** P < 0.01

服、家電製品、家具等生活用品に白が流行している事も一要因と考える。千々岩英彰によると5～6歳の幼児は純色を好む傾向が強く(女兒75.2%, 男児42.5%)その傾向は女兒に顕著である。また、男児は青や緑、黒などを好むのに対して、女兒は赤紫、赤などを好み、色相に対する好みの差がみられる。白は女子の幼児を除いた各年齢層に常に上位を占めている¹⁾と報告されている。また嗜好色の性差はトーンより色相に顕著にあり、男性は特定の色に集中し、女性は多色に分散する²⁾との報告もある。本調査でも一致点を確認した。

③所持服の色彩傾向

服種別の色彩傾向を図8に示した。女兒服のトーン傾向は、v, ltに高い所持率を示し、次いでdp, dkである。色相ではR, RPの所持率が高く次いでB, Yである。NeではWが大部分を占めている。これらを服種別にみると、v2がTシャツ・ランニング、ブラウスを除く全ての服種に高率を示した。Wはジャンパー・スカート、コートを除く全ての服種に高率で特にブラウスに92%と圧倒的な高い値を示し、次いでTシャツ・ランニングに高くみられる。またTシャツ・ランニング、ブラウス、セーターの上衣類には、W, lt24, v8, lt8等明るく軽やかな色調の物が多く、スカート、ズボンの下衣類とジャンパー・スカート、コートにはdp18の深い色や無彩色が多く出現している。また、ワンピースには他の服種と異なり多色が用いられて

いるのは、日常着から外出着まで多様性があるためと思われる。

男児服の傾向は、トーンはv, dp, dkに高率を示し、女兒に多くみられたltは低率である。色相では、Bに次いでY, Rが高率である。NeではW, Bkが高率である。これら服種別にみるとv 18はTシャツ・ランニング、ブラウスの上衣類に、dp, dkの18はズボンおよびセーター、ジャンパーの冬物に出現率が高く、服装の全てに青系が用いられ、ここでも性差が明確にうかがわれる。WはTシャツ・ランニング、ズボン、Bkはセーター、ズボンに高率である。その他、Tシャツ・ランニングは他の服種に比べ多色が用いられ、ズボン、ジャンパー、コートにもややその傾向がみられる。これら男児の日常着は、デザインがシンプルであるため多数の色彩で楽しみ個性を表現する要因になっているのではないかと考え、この傾向は女兒よりやや強いように思う。

以上のような服装の色彩傾向は、トーン、色相については女・男児共に嗜好色と類似の傾向を示したが、W, Bk等無彩色に関しては服装に非常に高い出現率を示し、着用色の特徴となっている。また、服装の色の用い方は、上衣にさえた明るいトーン、下衣には濃いトーンを用い、対照トーンを主とした明快な感じの調和を作り出している。 χ^2 検定結果は、表6・7に示したが、女・男児の各服種の全てに5%の有意水準が認められた。トーンには有意性が強く働いたのに対し、色相にはバラツキがみられた。

「形は知性にはたらきかけ、色は感情にはたらきかける³⁾。」といわれる。色の感情の性質は、赤は歓喜、活力、黄は快活、明朗、緑は安らぎ、平静、青は落ちつき、ピンクは愛らしさ、やさしさ等々の要因から眺め、幼児達は心身の健全、よりよい教育環境にあるものと思われ、今後更にこの点についても追求して行きたいと思う。

要 約

1. 子供服の入手方法は、既制服の利用が大半を占めるが、お下がり服の利用も多い。手作り服は、女兒服に多くみられ母親の手による物が多い。

2. 所持服の好みは、女兒年少にワンピース、年長はスカート、ブラウス等年齢による違いがみられる。男児はTシャツ、ズボンが大半を占めた。好みの理由は、着脱しやすい、着くずれしない、組合せやすい等機能面が重視されている。

3. 子供服模型・スモックによる嗜好色は、女兒は赤・ピンク系、男児は青・緑系に集中した。

4. 嗜好色のトーン傾向は、母・子共に上衣はv, ltの2トーンであり、下位はd, Itgである。色相傾向は、母・子共にR, Y, RP, Neの嗜好が高く、更に女兒は多色に分散した。

5. 所持服の色彩は、女兒は上衣にlt 24, Wが多く、下衣はv 2, dp 18, Neがみられた。男児は、上衣にv 18, 下衣にdp・dkの18が多く青系に集中した。次いでW, Bkであった。

稿を終わるに当り、御指導・御協力いただいた本学付属幼稚園長三輪弘道教授、松尾愛子前主任、名古屋文化幼稚園寺島房子主任に深く感謝申し上げます。また、園児・父母の皆様の協力に対し謝意を申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 千々岩英彰：色を心で視る，192～194 (1984)
- 2) 細野尚志：日本人の色の好み，9～10，財団法人日本色彩研究所 (1981)
- 3) 松岡 武：色彩とパーソナリティ，色でさぐるイメージの世界，13～14 (1982)